

### 1) 少子化の要因と今後の少子化の見通しについて

家が狭い、公的支援策が不備、父親の育児参加が不足——等々も、要因の一つには数えられるが、そのどれもが「決め手」にはなっていないと思う。つまり、この国では子を持つ母親があまり幸福そうに見えないのが、子を持つことへの躊躇いの最大の原因なのではないか。

瞬間的に、あるいは発作的に子どもを欲しいと思うことはあっても、産む側の女の立場に立って冷静に考えてみると「自己実現喪失」に繋がる困難ばかりが待ち受けているように思えて、踏み切れないのではないかと思う。連日、まさかと言うような事件が頻発するこの国で、ただ生きていくだけでも大変な状態が続いている限り、少子化にブレーキがかかることはないと思う。

### 2) 子供が親の所有物であるという意識について

「子どもは親のもの」という意識の底には、子どもを、家系を継承する存在だとする「家制度」の名残りがあからずからではないか。これは時間の経過とともに次第に薄れていくことだと思う。むしろここでは「義務意識」のほうが問題で、働く母親が増えていく中であって、こうした義務意識は、母親の過剰な「負い目」を生む源泉となり、「母性神話」と相まって、母親というものに対する呪縛を強めているように思う。

しかしながら、介護の世界が急速に変わってきたように、子どもも、親だけでなく社会全体がみていくべきもの（子どもを他人にみてもらうことに対して親に負い目を感じさせないことも含めて）ということ、はっきり知らしめてやりさえすれば、義務感に縛られた母親の「孤立した苦悩」の相当な部分は取り払われると思う。

### 3) 子供を生み育てようとする気持ちについて

政治、経済も含めてこの国自体がもっとしっかりと歩みを定め、この国に身（籍）を置くことで個々人の夢や希望がある程度は叶うということが証明され、さらに、せめて先行二世代ぐらまでの具体的なビジョンが見えてこない、怖くて子など持てないのではないか。

### 4) 政府の少子化への取り組みについて

国が本気で「子どもを作って欲しい」と望んでいるようには見えない。つまり、

何故少子化が困るのかの「説明」に説得力がない。(よくよく考えて見ると「心底困る」と聞いたこともないような気がする。ただ人口が減ることを憂いているようにしか見えない。) 経済伸長の延長線上の話として、いわゆる「20世紀幸福論」との兼ね合いで、「少子化」を打破させたいと言っているようにしか聞こえないのが、女たちの胸にストレートに響いていかない所以だと思う。

「国の経済のために、個人の人生が窮屈(犠牲)になるのはイヤだわ」という言葉に対して、きちんとした「答え」を用意しなければならないと思う。

対策は、やらないよりはやったほうが良いと思うが、今後は散発的にやるのではなく「国民運動的キャンペーン」を張るぐらいのつもりで、集中的にやらなければ、パブリック・リレーション効果は期待出来ないのではないか。とかく政府主導のキャンペーンは遠慮がちで、チマチマやるため中途半端な「死に金」を使っただけに終わり、結果として不発になることが多い。キャンペーンをやる場合は、ターゲットを「子どもを産む可能性のある直接的な対象者」に絞らず、多様な層の多様な考えを網羅して、広い見地から「少子化」を考えて貰えるようにしていかなければ、結局は、議論が堂々巡りをするだけになると思う。

#### 5) 国、民間、地域の少子化対策について

このような区分けが果たして効を奏するのであろうか。よく解らない。

#### 6) その他

今すぐ具体的ではないにせよ、潜在意識として「子を持ちたい」と思っている女たちは少なくないと聞く。特に、出産可能年齢のリミットに近づいた女たちが、急に焦りだし、中には慌てて果敢なる「挑戦」を試みるも「時、既に遅し」で、諦めざるを得ない人がかなりの数に昇るとも言われている。

そんなギリギリのところに差しかかっている女たちや、結果として「産まない」を選択してしまった女たちの「心理」をきちんと分析し、そこに焦点を合わせた対応策を講じていけば、「数」としての成果はともかく「産んでもいいかな」という「気分の醸成」に繋がり、波及効果は期待できるのではないかと思う。

最後に、いささか語弊のある言い方だが、ものをよく考える女が産みながら、ただ漫然と生きている(ように見える)女が、率先して子を産んでいるように見えることが、イメージを重んじる今の時代において、実は一番の問題なので

はないかと思う。

※別添資料あり

『ガジンいらすと利  
夏石鈴子著  
「キッと、大丈夫」

わたしは、自分で働いて自分のお給料で暮らしていかなければならないから、妊娠がわかった時、とにかく保育園のことをどうにかしなくちゃ、と思った。仕事をやめるとか、育児休暇を一年とるという選択肢は、わたしには全くなくて、できるだけ早く仕事に戻る。それしか、選べなかった。

お腹が少し大きくなった八月、わたしは区の保健福祉センターの生活支援課へ、保育園の申し込みの方法を訊きに行った。係の人は、まだうんと若い男の人で、わたしのお腹を見て、お子さんが生まれてから来て下さいと言った。

わたしは、その言葉にぎくつとした。  
わたしは、自分がこれからコドモを生む人間だから、コドモは必ず無事に「生まれてくる」と信じて、その後のことを心配している。でも、目の前のこの男の人にとっては、わたしのコドモは、「もしかしたら生まれてこないかもしれないじゃないですか」っていう存在なんだ。だから、生まれでこなだかもしれない不確かなコドモの分は、今から申し込めないっていうことなんだ。生まれてこないっていうことは、お産の前に、このコが死ぬこと、流産してしまうことも、この人は想定しているんだと思ったら、悔しかった。このコは必ず生まれてくるのに。

それでも気を取り直して、

「それじゃあ、生まれた後に来たら、必ず入れるんでしょうか」  
と訊いたら、

「それは保証できませんよ」

と、平気な顔でその人は言った。

「今、保育園が足りないんです」

その「生活支援課」の人は言った。

「まあ運が良ければ入れるかもしれませんが」

生まれたての赤ん坊の命が、運によって左右されるなんて、たまらないと思った。

今にしてみれば、あの全然親身になってくれない係の人で良かったと思う。あてにならない生活支援課に助けってもらわないで、コドモを見てくれる場所を自分で探そうと思えたのだから。

保育園に入るのは大変だとは知っていたけれど、ここまでとは思わなかった。

○歳児保育とあっても、○歳の子供だったら誰でも入れるわけではない。四月の段階で、五カ月か六カ月になっていないと、入れないのだ。みなさん、知っていましたか？もし六月に生まれる赤ちゃんだと、もう絶対に保育園に入れない。新年度が始まる四月以降、ほとんど空きがないから。だから逆算して秋に生まれてくるように、計画して妊娠する人もいるらしい。保育園入園のために、今日はだめ、とか、今日こそしなくちゃって、セックスをコントロールするのだろうか。わたしは元々、子供を愛の結晶なんて言うのは下品で嫌いだけれど、そうやって生まれる子ども、愛の結晶なんて呼ぶのだろうか

か。人間は、一年を通して突然生まれてくるものだ。決して四月の○歳児保育可能のために生まれてくるわけじゃない。

産休明けで見てくれる認可の保育園は区には七カ所しかなくて、もうとても無理なので、わたしは無認可の保育室を探すことにした。生活支援課でもらった保育園の案内の後ろに、保育室の案内が載っていた。産休明けから見てもらえて、申し込みは、保育室に直接して下さい、とあった。電車に乗って帰る時、初めてわたしは席を譲られた。もうちゃんと他の人にもわかるくらい、お腹は大きくなっただと、覚悟のような気持がわいてきて、さっき言われた「生まれてから来て下さい」という言葉の意味を、もう一度憎んだ。

家に着いて、すぐに二カ所の保育室に電話をして、見学の予約をさせてもらった。その頃住んでいた家からは歩いて四十分くらいかかるけれど、とにかく入園を予約させてもらわなければ、安心して生めない。

最初に行った所では、○歳児の赤ん坊は北側の部屋に寝かされていた。日の射さない部屋には、ベビーベッドがいくつも入っていて、赤ん坊は、なんだか不自由な幼虫のように見えた。もともと動く赤ん坊に囲まれて、若い保育士さんが、ぽつんと坐っていた。

園長先生は、今だったらまだ空きがあるので申し込みますか、と用紙を出してきた。見学したばかりだし、他の所と比較するべきだと思っただので、その日は申し込まなかった。自分のコドモを見てもらう所なのだ。どこでもいいわけじゃない。

次に行った所は、建物は木造で古かったけれど、子供たちが大きな声をあげて部屋中を走りまわっていた。その先生は、仕事のこと、帰りの時間のことを尋ねた。話をしている間中、台所から、包丁の音と、かつお節の出汁だしの匂いがしていた。預けるといふことは、賭のようなものだ。毎日、コドモを連れてくることが、ここなら嫌な気がしないので済みそうだ。わたしは、予約の手続きをさせてもらい、先生は、安心して元氣な赤ちゃんを生んで下さい、と言ってくれた。

コドモを見てくれる所を見つけるのも大変だったけど、世の中は、子供を預けることに対してとても厳しい。新聞を注意して見てみると、必ず読者の投書欄に「大切な乳児期のしつけを他人にまかせて、一体何事だ。親の愛情に飢えて将来が心配」的な意見が出る。そういう投書は、だいたい六十代とか七十代の女の人から多い。お金のために働くことの、どこが悪いのか全然わからない。働かないでお金がなくなるほうが、よっぽどうちのコドモにはかわいそうだ。他人に自分のコドモを預けることは、別にわたしに

愛情がないわけじゃない。一緒にいてやれない時間を大切にめんどろみしてくれる人に、手伝ってもらっているだけだ。保育園に子供を置いていくと、泣いてかわいそう、という投書もあったけれど、子供なんて、母親がトイレに行っても泣くんですよ。保育園で一日中泣いているわけじゃない。最初は、こんな投書にいちいち頭にきていたけれど、この頃は、ふーんと思っただけで面白く切り取っている。人にはそれぞれの事情と立場があるのに。今の時代に子育てをしていない人に言われてもね。わたしはわたしのやり方でコドモを大事にしています。

同じ保育室に、双子のお兄ちゃんが来ていて、弟は認可の保育園に通っている人がいる。なんて同じ保育園にしないのって訊いたら、ひとつの家庭で、同じ保育園に二口割りあてると不公平になるって、生活支援課に言われたそうだ。これは、不親切というよりも、意地悪だ。一体何の得がある？ ただでさえ手がかかる双子なのだ。少しでも生活を支援する気持があれば同じ保育園にするのが当たり前だろう。

家族の介護のために、子供を保育室に一時的に預けている人がいる。この緊急保育は二カ月が限度らしいけれど、病気は二カ月たっても治らない。もう少し期間を延長してほしいと支援課に電話したら、「困っている人は、他に掃いて捨てるほどいるんだから

「あなただけ優遇するわけにいかない」って言われたそう。掃いて捨てるだろ？ あなたは一体何者？ そうだよ、公務員には、わからないのよって、保育室の友達が言っていた。だって、公務員って保育園に優先的に入れるんだよ、産院で一緒だった人に、保育園に入れるのが大変って言ったら、うちは旦那が公務員だから大丈夫って小さい声で言うの、えっ？って訊いたら、公務員は必ず入れるのって言っていたよ。それじゃあ、担当者は普通の勤めをしている人たちの苦勞はわからないだろう。親身に支援もできないだろう、自分たちには関係のないことなんだから。

新聞に少子化って文字が出るたびに、不思議に思う。本当に少子化を問題にしているのか、と。政府の偉い人、こっそり保育園の申し込みに行ってみたらどうか。どんな扱いをされるか、よくわかるだろう。

少子化の原因が女性の高等歴・晩婚化にあるって、もっともらしく通っているけれど、それは本当か？ この男の子供を生みたいって思わせる男が減ってしまったのが、実は大きいんじゃないか？ 本当に好きに思える男に会えないから、子供が生めない女の人だっているはずだ。

わたしのコドモを、引き受けてくれたのは、庭もない小さな無認可の保育室だった。

生まれてくるコドモを邪魔者扱いしないでくれた所だ。六時に仕事が終わると、わたしはコドモの写真を手帖から出して、ちょっと見る。丸い目、丸い口。フクロウのひなみだしい。ああもうすぐこのコに会えると思って、わたしは毎日駅へ走っていく。

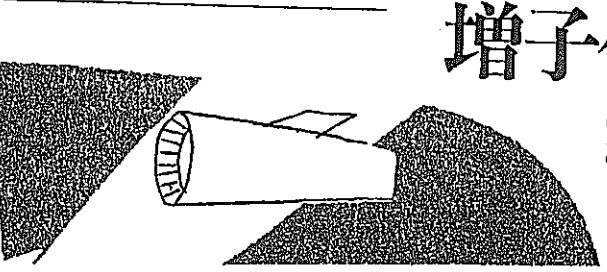


# 出生率でみる JaponとFrance 少子化の悩み VS 増子化の悦び

倉田保雄・文  
Text: Yasuo Kura  
平田利之・画  
Illustrator: Toshiyuki Hirata

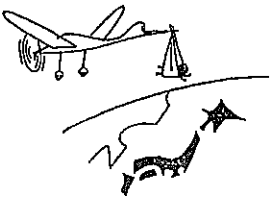
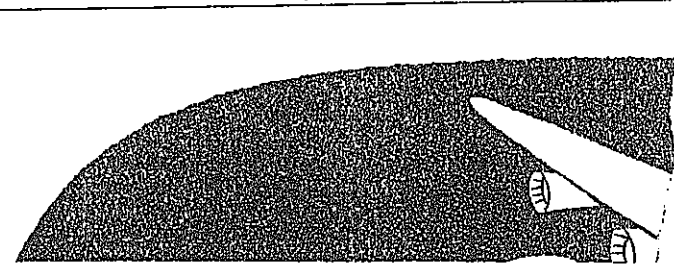
このようにして、出生率でみる少子化の悩みと増子化の悦びを比較する。出生率とは、1000人あたり出生する子どもの数を指す。日本は1980年、出生率が10.5人であった。フランスは1980年、出生率が20.5人であった。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。

出生率	10.5人
出生率	20.5人
出生率	10.5人
出生率	20.5人
出生率	10.5人
出生率	20.5人
出生率	10.5人
出生率	20.5人
出生率	10.5人
出生率	20.5人



出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。

出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。



出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。

出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。

出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。出生率の差は10人である。



## 第2回少子化社会を考える懇談会 レポート

コラムニスト、「OL委員会」主宰 清水ちなみ

- (1) 少子化の要因と今後の少子化の見通しについて
- (2) 子どもは親の所有物であるという意識（子どもは親のものという権利意識と子育ては親がしなければいけないという義務意識）が我が国では強いと言われているが、それについてどう考えるか。
- (3) どうすれば、子どもを産み育てようとする気持ちになるのでしょうか。またその理由について。
- (4) 政府は少子化の流れを変えるため、男女共同参画社会の実現や少子化対策を講じ、また、各界の方々からなる国民会議を開き、子育てにやさしい環境整備を求めています。これまでの取り組みに対する問題点やその理由について。
- (5) 国において、民間において、地域において行う少子化対策について
- (6) その他ご自由にお願ひします。

できれば「建前」を述べておとなしくしていただきたいのですが、この場での私の役割は、働く女性達の「本音」を通して見えてきたものを述べることなので、失礼を承知で、考えを述べさせていただきます。皆様方に怒られないですむことを願っております。

また、期待される場所としては、主に(1)少子化の要因と今後の少子化の見通しについて だと思いますので、今までのお話し合いの中で出てきてないだろうと思われる点をいくつか、あとは素人考えで思いついたことをちらほらと述べます。

私は「OL委員会」という働く女性（現役OLとOL経験者）の娯楽団体を運営しております。一五年ほど前から一年に10回のアンケートを数千人のOLに向けて発送、回収という作業を繰り返しています。その中から、見えてきたことですので、データがすべて最新というわけではないこと、ある特定の（といっても「娯楽」が目的なので、色は付いてないと思うのですが）相手に向けてとったデータであることをおことわりしておきます。

また、ちょうどこのテーマについて本を作るべく、アンケートを実施し、書いている途中でしたので、そのデータも交えながら進めますが、まだ未集計のものも多く、完成されてない部分があることもお詫びいたします。

### (1) 少子化の要因と今後の少子化の見通しについて

特に今の世代だけを考えるのではなく、戦後50年、あるいは明治以来の100年を振り返る必要があると思います。

また、とてもいろんな要素が複雑にからみあったものであろうと思いますが、その中から、今までに出てきてないだろうと思われるもので、私が特に気になっている点を2点述べます。

#### ①「働く女性」と「働かない女性」との対立

■女性の選択肢が増えたと言われるが、では、それぞれ、どんな道を好み、歩もうとしているのかというアンケートをとったことがあります（「女のしあわせどっちでショー」）。

コーヒーが好き v s 紅茶が好き、貧乏旅行が好き v s 贅沢旅行が好き、など、どうでもいようなものも含まれているのですが、ある二つの設問について、非常におそろしい結果になって驚きました。

「仕事を続けたい」 v s 「続けたくない」、「子どもが欲しい」 v s 「欲しくない」、この二点。自分はどう考えるかということ以外に、お互いがお互いの悪口を激しく書いてきたのです。こんなことは他にはありえません。

簡単に例を挙げますが、先に子供を作った友人が、子なしの友人に対して、「子どもをもって初めて一人前」「私は日本の人口を増やしていいことをしている」などと述べて、絶交するケース続出。

また、婚姻と同時に大人からの「子どもはまだ？」攻撃にあい、怒りを爆発させるケース続出。

その一方、「仕事に生きる女って自分のこと、いい女だと思ってない？」「ギスギスしてがんばってて老後さびしくない？」など、書くのもこわいような声が多数。

エルサレムをはさんでにらみあうパレスチナとイスラエルのように、女性達の心の奥底に深い断絶があることを認識することは重要だと思います。

では、その原因は何か、そしてなぜ、この対立が少子化につながるのか。

#### ■対立の原因

こちらへん、なにぶん素人ですので、拙くて申し訳ありません。

明治時代に作られた国の形は、戦争に強くなるという目的がありました。昭和22年に男女平等に改正（でしたっけ）され、相続は男女平等に分けられることになりました。

本当はこれと同時に雇用機会均等法があったら良かったのにとと思いますが、その後、高度成長からバブル期という異常事態が約50年続いたために、経済がへこんだ今になって、50年のツケがまわってきていると思います。

この50年、経済が右肩上がりでも良かったから、ほころびずに来たのだらうと思いますが、各家庭の中では、家督を継ぐことも出来ず、家業を継ぐことも出来なかった父親が、サラリーマンという形で家から離れ、ヘトヘトになりながら外貨を稼いでくることが行われていました。この時期、日本の歴史上まれに見る女性の有職率の低かった時代です。普通なら、戦争で負けたときに、あるいは男女平等の相続になったときに、女性も働かなければ経済的にやっていけなくなっていたのではないかと思うのですが、異常事態であったために、ずるずると明治期をひきずった。

それが経済が落ちて、じゃあ労働力として女性も、という話になったときに、あるいはその前の段階で家族法の改正があったら良かったのにとおもいます。

前の時代（今でもそうですが）、結婚は職業でした。つまり、それによって、生きていく糧を得ると言うことです。女性が職を持てるようになったと同時に、未婚率の上昇があるのは当然のことです。

では、その職業とは、どういう職につきましたよーという契約だったのかというのは、民法を読めば書いてあるのですが、何度読んでも、そこには、お金とセックスと相互扶助の義務、あとは名前のことしか書いてない。もちろん大好きな人と結婚しますなどということは一字も書いてない。しかも、家族法というのは財産の項に含まれていて、これではまるで、言葉は悪いのですが「人買い」のように見える。しかも、その内容というのが、セックスの義務、介護の義務、そして対する「権利」というと、遺産の権利しかない。現代の目で見ると、これは売春法ではないかと思えます。

実際、結婚後に夫をきらいになった妻は、時々、自分のことを「セックス付き家政婦」と呼びます。よくある例です。また、売春と呼ばれるものも、その前に婚姻届を出し、その後に離婚届を出せば、違法行為ではなくなってしまいます。

女性に職業がなかった時代、それが当たり前だった時代ならともかく、今の女性にも職業のある時代に於いて、すべてこの婚姻モデルにしたがって結婚しなさいというのは無理です。しかも、コトはすべて未経験者のあやふやな想像力に於いておこなわれ、婚姻届を出した後に「しまった、まちがった」と思っても、相手が了承しなければ離婚も出来ない。まだ二〇歳や三〇歳の、いわばケツの青い時期に一度、あやまちをおかすと、一生を捨てることになる。

人々が、婚姻届を出すのに慎重になるのは当然のことです。そして、「婚姻届を出してから子どもを生みたい」という世間の思いこみもあり、子どもを生みたい人であっても晩婚、未婚となり、そして出産に至らないのではないのでしょうか。（主に「大離婚」を参考）

ところが、贅沢を言わなければ、自分の稼ぎで生活することは可能であるこの時代に於いても、自分で働かずに「結婚」という職を選択する女性も多く存在します（＝専業主婦）。彼女たちは「働くダンナを支える内助の功」ということで年金の負担がなく、そのうえ扶養控除などというものもあります。働く女性にとってはそれが気に入らないことは当たり前のことです。

一方の専業主婦からすれば、働く女性達の髪振り乱した子育ての様子を見たり、あるいは働きつつ子どもを作らずスタイリッシュに生活する様子を見て、「なににもあんなにがんばらなくても」という思いもあるでしょう。補助を受けているのですから「私はお国のためにいいことをしている」という意識もあるでしょう。

女性達が全員「働けない女」であった時代は終わり、今は「自立しようとする女」と「自立したくない女」が存在します。そして、一方への制度のみが充実していることがこの対立を激化させています。昭和22年の夫婦像しか想定していない今の婚姻法を今の時代に機能させようとする方が無理であると思います。

戸籍にしろ、健康保険にしろ、税金にしろ何にしろ、家族の形を「サラリーマンと

専業主婦」という基本形を採用している限り、働くOLの居場所はなく、社会からの疎外感を強く感じています。そして、旧時代の遺物である働かない女のための諸制度は、いまやただの「おいしい汁」であり、そこに「こども」が出現するとますますこの対立は色濃くなり、お互いがお互いのあり方に激怒し、そのとぼっちりが「こども嫌い」を生んでいるのではないかと考えます。

(参考)

OL委員会調べ、子供を産み育てることに否定的な気持ちについてとったアンケートでは、

こなしグループ	「こどもをもった親が嫌い	41.2%	(4位)
こありグループ	「こどもを持った親が嫌い	12.1%	(9位)
こなしグループ	「こどもは欲しくない」	42.2%	
こありグループ	「子どもは欲しくない」	3.8%	

■次に、困ったことに、自分の親も「働かない女」なのです。

自分名義の収入がなく、家の中で家族から必要とされて初めて生きていけるとい生涯を送らざるを得なかった彼女たち母親世代がどのように生きてきたか。それを娘達は どう受け取っているか。

かつて、「お父さんには言えないこと」という本を作ったときに気づいたことです。

自分の父親に関して、否定的な回答を寄せた娘の割合が約46%。みな、一様に口が堅く、語りたくないとのことでアンケートだけではその内情をさぐることができず、面接に切り替えて作った本です。暴力をふるう父が続出。封建的な旧家出身であったり、バブル期の仕事で身も心もボロボロであったり、そういういろいろな父に対して娘が述べます。そこで実にわかりにくい、複雑な動きをしていたのが、妻達の姿でした。

娘の父に対する否定的意見は、妻達から娘に吹き込まれているものでした。妻は、幼稚園に通う娘に、夫の浮気の相談をしたり、あるいは、荒れ狂う暴力亭主の言うがままに毎日くつしたを出してやったり、実に不思議な行動をとっていました。

全員が、職を持たない、専業主婦でした。夫から殴られ、同窓会にも出してもらえず、誰の金で食ってるんだとののしられ、それでも離婚せず、明るく、趣味の世界に邁進する母達の世界がありました。

私はある時点で、これは職を持たない彼女たちの、生きる術であることに気づきました。自分の名義でのお金をもたない彼女たちは、家族の中の誰かから必要と思われていなければ存在意義がなくなります。自分で家を出ようとは思わず、子が出ていくなら付いていく。夫にくつしたの在処を教えようとせず、自分でやらせようともせず、出してやる。私たちが育った家庭は多かれ少なかれそういう構図になっていました。

こどもは、そこに生まれただけで、親のためのひとつのツールとして出発しなければなりません。「こどもがいなければ存在しえない母」を最初から背にしまった人生。実際、親世代の人たちは「老後のためにこどもを生む」と平気で言います(婚姻法、

年金の考え方そのものです)。

親世代の「女にあまり職がない」という状況が、そのまま子世代にまで続いていたのなら、同じ女同士でわかりあえたのかもしれませんが、幸か不幸かそうではないので、子世代は、親に対する疑問を持ち得ることとなりました。自分の親がきらい、自分がきらい、と答える人たちがこどもを生みたいと思うのでしょうか？

<参考>

こなし「自分の親が嫌い	19.4%	(12位)
「自分が嫌い	16.4%	(13位)
こあり「自分の親が嫌い	9.0%	(11位)
「自分が嫌い	8.2%	(12位)

こなし「虐待をするのではないかと不安	34.0%	(8位)
こあり「	18.6%	(7位)

「虐待されて育った子は、自分の子どもも虐待すると聞いた」など、自分と親との関係を書いてきたものが多くありました。子どもを生まないことが、自分の親に対する復讐であると書く人も。自分が、自分の母親のようになりたくないのです。

戦後、ずいぶん長い間、「男は社会人、女は非社会人」と分けられていたところに、いきなり、女だけけども社会人というOLが出現することになりました。ここ10年、20年のことです。基本的には働いてお金を得ることは当然のように思っていますが、会社では男女平等かと言えばそうでもなく、家に帰れば早く結婚しろとせかされ、社会的立場としてはまるで「おかま」のように居心地の悪い社会生活を送っています。「おじさん」でもなければ、「お婆さん」でもない。どちらとも違う新種であり、居場所のない人間だからこそ感じる事が出来ることもあるのです。それを周囲の人間にわかってもらおうと思っても無理だとも思っています。

晩婚だの、未婚率だのという数字がいろいろありますが、欧米では3世代、4世代かけて変化してきたものが、日本だと30年くらいの間に起きてしまいました。直接の親子に生じた大きな変化は、お互いの理解を超えてしまったように思います。

職を持つ世代から見ると、前の世代は、わざわざ「ひとりでは生きられない人間」を作りだし、他人から頼りにされることによって自分自身をも生き延びてきた、ように見えます。妻がお金を稼ぐことができないのと同時に、夫も、自分の身の回りのことをなにひとつ出来ません。特に男性は悲惨です。自分の食事も作れない、自分のくつしたも出せない高齢者を作り出してしまいました。

専業主婦が、家の家事を一手に引き受けるというのは、責任感であるのと同時に、自分が生き抜く術でもありました。その結果、全然、家事ができない夫と子どもという存在を生み出しました。いま懸念されている高齢者問題というもの、手足が動かないわけでもなく、病気でもないのに、自分で自分ひとりぶんの家事能力すらない高齢者だから問題になるのであって、全員が自分のごはんだけでも作れる状態であれば